

研究タイトル：「都市高齢者への共助的実践活動と世代間交流の研究」

代表研究者：郭 莉莉（北海道大学大学院 博士後期課程）

1. 研究背景

日本では、1980 年前後より高齢者の生活保障の場として、地域社会が着目されるようになった。その背景には、利用者の増大と時間・人の不足によって個別ニーズに十分対応できず、高齢者の主体的な行動を確保しにくい、また利用者の社会関係に十分に配慮する余裕がない施設ケアの状況があった。社会福祉の基礎的な視点としては、個別ケアや社会関係の維持・構築、主体性の重要性が指摘されている。高齢者福祉においても、高齢者が住み慣れた地域で暮らし続けることが出来るよう、地域・在宅福祉が基本理念に据えられ、「小規模」「多機能」「地域密着」といった特徴をもつ小規模多機能施設におけるケアが注目されるようになった。

小規模多機能施設の中には、高齢者だけでなく子どもや障がい者など多様な人々を受け入れ「共に生きる」という新たなコミュニティを形づくる営みである「共生ケア」（平野 2005：14）を特徴とするものがある。地域の中で高齢者が多様な他者との関わりながら、主体的に暮らすための居場所を形成する「共生」は、高齢者福祉における一つの重要な視点となっている。また、個人を保護してきた家族や地域共同体などの弱体化により、高齢者が社会的に孤立しやすい現代社会では、個人と全体社会を媒介する「中間集団」（金子 2007：11）の創出が課題となっている。NPO や近隣地域での人間関係を基盤とした支え合いである「共助」に基づく小規模多機能施設の福祉の実践は、高齢者を多様な他者と相互に結合し、社会生活の様々な部分を構成する中間集団としての可能性を有している。

さらに、NPO によって運営される小規模多機能施設には、福祉コミュニティの発展に対する役割も期待される。地域福祉は、個人を生活の主体、そして地域社会を形成する主体として捉える視点を有している。高齢者を「助けられる存在」であると同時に「助ける存在」（上野谷 2009：454）としてみることは、地域に暮らす多様な他者に対する高齢者の主体的な役割を見出すことにつながるだけでなく、地域社会という生活共同体に対する高齢者の積極的な役割と両者の相互関係を捉えるという意味でも重要な視点であると考えられる。

2. 調査課題と調査概要

以上を踏まえ本研究では、NPO が運営する小規模多機能施設における共助的福祉に焦点を当て、高齢者の生活を保障するケアの実践や「中間集団」としての機能、また地域における多様な人々との「共生」や「支え合い」の実現に向けた当該施設の役割を明らかにする。

1980 年代半ばに登場した小規模多機能施設は、この 30 年の間に、それぞれが異なる特色を持って発展してきた。その典型例である宅老所は、①高齢者一人ひとりの必要に応じて通所、泊まり、訪問、居住等多様なサービスを展開してきた形態と、②高齢者だけでなく障がい者・子どもへと利用者に対する間口を広げてきた形態の 2 つに分類できる（平野 2005：20）。本研究では、主に高齢者向けの多様なケアサービスや生活支援サービスを提供する前者を「高齢者中心型」、地域での暮らしに支援を必要としている多様な人々を受け入れる後者を「共生型」と呼ぶことにする。今回調査した北海道札幌市と富山県富山市の施設はこの 2 つの形態にそれぞれ該当する（表 1）。

また、高齢者福祉施設における世代間交流については、高齢者の生きがいづくりや子どもに対する教育効果等（多湖 2006：1）が指摘されている。特に小規模な「共生型」施設は、大規模な「幼老複合施設」に比べ、高齢者と子どもが日常的に交流を行いやすく、「なじみの関係」を形成しやすいとされる（永和 2008：38-9）。今回調査した東京都小金井市の施設は、高齢者デイサービスと保育所を一体化した施設であるため、乳幼児の一時預かりが多い一般の「共生型」施設に比べて、高齢者は毎日同じ子どもたちと長時間接することができる点で特徴的な事例である。以上より、本研究では、この施設を高齢者と子どもの世代間交流に特色を持つ「幼老共生型」として、「高齢者中心型」と「共生型」に追加し、小規模多機能施設を 3 つの形態に分類して分析する。

表 1 調査概要

分類	調査地	調査時期	調査方法
高齢者中心型	「花風」 (北海道札幌市)	2014年10月～2015年7月 に6回訪問	・ 施設代表者と職員(3名)への半構造化インタビュー調査 ・ 施設利用者の様子を中心とした参与観察(施設主催のイベントへ3回参加)
共生型	「しおんの家」 (富山県富山市)	2015年8月3日～4日	・ 施設代表者と職員・ボランティア(7名)への半構造化インタビュー調査 ・ 利用者の様子を中心とした参与観察
幼老共生型	「また明日」 (東京都小金井市)	2015年2月23日～25日	・ 施設代表者と職員・ボランティア(7名)への半構造化インタビュー調査 ・ 利用者の様子を中心とした参与観察
		2015年4月～5月	・ 補足調査:施設利用者と家族への質問紙調査(計15票回収)

なお、本研究では質的調査に基づき、高齢者福祉におけるNPOの小規模多機能施設の機能について、以下の2つの側面から明らかにする。第1の側面は、高齢者福祉における在宅ケア支援施設としての機能であり、各施設の「i. 高齢者ケアの特徴」について、施設空間の利用方法や高齢者の生活の様子から分析する。第2の側面は、高齢者個人を支える「中間集団」としての小規模多機能施設の機能である。これは、主に施設内の社会関係を対象とする「ii. 世代間交流」、地域社会の中での小規模多機能施設内外での交流の現状と機能を「iii. 地域における交流と役割」としてまとめ、各施設における共助的実践の機能的な共通点や相違点を比較分析していく。

3. 調査施設の概要

(1) 北海道札幌市：NPO法人「在宅生活支援サービスホーム 花風」（以下、「花風」）

認知症高齢者を中心とした下宿施設や通所介護施設、地域住民向けの「ばりあふりーしょっぷ 花風屋」などの5つの施設（1号館～5号館）を運営する、「高齢者中心型」の小規模多機能施設の事例である。特別養護老人ホームに17年間勤めた代表が、一人ひとりに寄り添ったケアを提供したいという思いで、2000年に設立した。

(2) 富山県富山市：NPO法人「しおんの家」

「必要な時に必要なサービスを」という代表の思いから、1999年に富山県内初の認知症グループホームに富山型デイサービスを併設して設立された「共生型」の小規模多機能施設である。認知症対応型の通所介護と訪問介護を行う「さふらん」、高齢者向けグループホームの「望」、高齢者・障がい者の共生型グループホームの「愛」、そして高齢者や障がい者・児の通所介護のほか、年齢や障がい・疾病に関係なく誰でも入所できる「グループリビング」や地域住民向けのカフェ・多目的リースペースなどの多様な事業を行う「信」の4つの施設を運営している。

(3) 東京都小金井市：NPO法人「地域の寄り合い所 また明日」（以下、「また明日」）

認知症高齢者専門のデイホーム（通所介護）と保育所、地域に開放された「寄り合い所」の3事業を、同一施設内で運営する「幼老共生型」の事例である。年齢や障がいや生活の場を分けずに様々な人が同じ時間を過ごし、交流する場、お互いが支え合う場をつくりたいという代表夫妻の思いから、2006年に設立された。築50年のアパートの1階5世帯分の壁を壊して一つの空間に改修した施設内では、高齢者が日中の長い時間を保育所の乳幼児とともに過ごしている。

4. 調査結果

(1) 「花風」

下宿をしている高齢者は、日中は1階のリビングルームでのんびりと過ごしたり、デイサービスなどへ外出したりしている。口喧嘩はするが、仲が良く、夜には一緒に晩酌をしたり、お互いに面倒を見合ったりして、「家族」のような関係を形成している。職員も、「花風」を「家」として考えており、高齢者を「うちのじいちゃん、ばあちゃん」のような存在として捉えている。そして、高齢者は、毎日、食事の配膳・後片付けや洗濯物たたみ、ダスターの裁断などを通して、日常生活上の役割を果たしている。利用者の殆どが高齢者である分、職員を除き他世代との交流は多くないが、「花風」を訪れた職員の子どもが職員の動きを学習し、高齢者に働きかける様子もみられた。

また、地域住民からの寄付品や野菜の食材などを低価格で販売する「ばりあふりーしょっぷ 花風屋」は、地域住民の買い物・交流の場であるだけでなく、福祉相談の相手になり、「福祉の小さな相談窓口」の役割も果たしている。さらに、施設側は「夏祭り」や「クリスマス・パーティー」、「バリアフリー居酒屋」などの行事を開催し、施設利用者と地域住民との交流を促している。

(2) 「しおんの家」

共生型デイサービスを利用する高齢者は、1階のフロアでテーブルを囲んで一緒にテレビをみながらお茶を飲んだり、歌を歌ったりして、ゆっくりとした時間を過ごしている。高齢者が買い物のビニール袋をたたむ作業を手伝う場面もあり、日常生活の中で自分なりの役割を「発揮」している。デイサービスの利用者と職員間、そして利用者同士の間には「なじみの関係」が形成されている。さらに、グループホームでは、職員と利用者が共同生活を通して、「大家族」のように暮らしている。高齢者と職員、職員の子どもに加え、障がい者・児の間には支え合いの関係がみられる。たとえば、高齢者は職員として勤務する障がい者とのかわりを持ち、声をかけ合いながら生活している。今回の調査では、高齢者が食事の用意をしてくれた障がい者に「ありがとう」と声をかけたり、暑いときには障がい者が高齢者に水分の補給について尋ねる場面がみられた。生活空間を共有することで、独居高齢者同士の生活では生じにくい、世代間の心のふれ合いが自然に生まれている。

地域住民との交流については、地域交流スペースとしてのコミュニティカフェ「みんなdeよってカフェ」や趣味教室「いっしょにせんまいけ」が運営されている。これらの場合は地域住民と施設、地域住民同士を結びつける接点となっている。ま

た、「地域の中の普通の家」を目指している「しおんの家」は、地域のごみ当番や草取りのほか、地域の祭りや運動会など、様々な行事やイベントなどに参加し、地域住民との関わりを保っている。

(3) 「また明日」

デイサービスはプログラムがなく、長屋のような施設内で、高齢者はソファに座って新聞やチラシを眺めたり、園児を抱っこしたりして穏やかに一日を過ごしている。一部の高齢者と園児は、互いの名前や特徴を個別に認識しており、食事の世話や散歩などの日常的なふれあいを通じた「なじみの関係」の形成がみられる。そして、園児との関わりの中で、高齢者は遊び相手として、また食事や着替えなどの場面で世話役としての役割を果たしている。園児の家族を対象とした質問紙調査では、家族も園児と高齢者との世代間交流を肯定的に認識していることが伺えた。こうした生活の様々な場面で「支え」を必要とする子どもの存在は、高齢者の役割を引き出す「しかけ」となっており、職員は子どもとの自然な関わるの機会をさりげなく高齢者に提示している。

また、地域の誰もが利用できる「寄り合い所」には、地域の小学生など子どもが訪れ、施設の園児の遊び手や話し手になっている。また、園児と認知症の高齢者が一緒に出掛ける「散歩」という日常的な行為を通して、施設側から地域の人々に挨拶や声かけなどを行い、地域との関わりを作り出している。

5. 考察

(1) 高齢者ケアについて

1 つ目は、家庭的な雰囲気とゆとりのある生活リズムである。ハード面の特徴をみると、3 施設の建物は、いずれも民家改修型/新築した小規模施設で、家庭に近い住環境が作り出されている。少人数・小規模であるため、職員は施設内を走り回る必要がなく、高齢者一人ひとりに目が届きやすい。また、高齢者も落ち着いて一日を過ごすことができる。中には、不安や徘徊などの認知症の周辺症状が改善された場合もある。

2 つ目は、「なじみの関係」や「家族」のような関係の形成である。大規模施設に比べ、小規模施設は利用者数が少ないため、利用者と職員、利用者同士の間では「なじみの関係」を形成しやすい。小規模施設が通所介護だけでなく、居住系サービスも提供する場合、こうした関係がさらに「家族」のような関係にまで発展することもある。小規模多機能施設は、高齢者にとって、家族以外の他者と親密な関係を形成するもう1つの「居場所」となっている。

3 つ目は、生活の主体者としての暮らしと「役割発揮」である。3 施設においては、方法こそ異なるが、「役割縮小過程の存在」(金子 2011a : 14) である高齢者に「役割」を発揮してもらうような場面が多く作り出されている。高齢者は、家事の手伝いや園児の世話などを通して、自分なりの役割を獲得している。「役割」を見出し、生きがいを感じながら生活することが高齢者の心身のケアにつながると考えられる。

(2) 世代間交流について

小規模多機能施設の利点は、少人数で生活を共有できる点であり、特に「共生型」「幼老共生型」では多様な属性を持つ人々と高齢者との交流が発生しやすくなる点にある。高齢者にとって、仕事や役割の欠如は、自分のなすべきことがわからない、自己の生を空虚に感じる要因となってしまうことがある(金子 2014 : 200-1)。逆に、自分のなすべき仕事や役割を認識すると、自分の存在価値を肯定的に捉え、充実感を得る可能性が高まると考えられる。

今回調査対象とした3つの小規模多機能施設では、自分と異なる属性の人がいることで、高齢者の生きがいにつながる役割や仕事を生み出している。高齢者が「支えられる側」だけでなく「支える側」に立つことで、自発的な行動が引き出されるのである。「幼老共生型」での子どもと高齢者、「共生型」での高齢者と障がい者・児の間にこのような関係がみられ、職員は「周囲に自分が支えることができる人がいることへの気づき」を高齢者に促すようなケアのあり方を意識している。

日常の何気ない生活の場面から高齢者が役割を取得することで、支える側に立つ可能性を拡げることが世代間交流の利点であり、いずれの施設の代表者もこの点に意識を向けている。高齢者の意思を尊重し自主的な行動を後押しすることで、世代間交流が形成・維持され、役割の「創出」から「発揮」に至っていると考えられる。

(3) 地域における交流・役割について

3 施設はそれぞれ運営理念、事業内容、施設の空間・雰囲気が異なるが、地域との交流を促す場が設けられているという点で共通している。「高齢者中心型」の「花風」は、施設内における家族的な関係や家庭に近い日常生活を理念としているため、あえて日常生活とは異なる「ハレの場」としての「行事的交流」(パーティー、祭りなど)が他の施設より、数多く企画されている。「共生型」の「しおんの家」は、多機能施設であるため、様々な種類の交流が行われており、施設内外における地域住民との「日常的交流」(ボランティアの受け入れ、ごみ当番など)を中心に、「地域を受け入れる」・「地域に参加する」という2つの形の交流がみられる。「また明日」でも、地域の誰でも利用できる「寄り合い所」や、日々の生活行為である「散歩」といった「日常的交流」が行われており、それを通して施設利用者・職員と地域住民の間に相互的な見守

りや支え合いの関係性が生まれている。以上のように、各施設は施設利用者と地域住民をつなげる「接点」の場を提供し、また施設内外で積極的に地域住民との交流を図っている。

さらに、これらの小規模多機能施設は、地域社会のニーズに応じて各施設がそれぞれの機能を多様化させることに伴って、施設の形態も多様化しながら展開されてきた。すなわち、家族や地域共同体といった従来の中間集団の福祉機能低下の課題に対して、各施設は「機能の多様化」により対応したが、それはそれぞれが機能的な特色を有する「施設の多様化」を促進させ、結果的に個人が新たに選択しうる複数の中間集団を創出することにつながった。以上のようにして小規模多機能施設は、孤立した個人を包摂し、社会へ媒介する中間集団としての機能を担うと考えられる。

6. まとめ

小規模多機能施設では、家庭的な環境と雰囲気の中で、高齢者はきめ細やかなケアを受けられるだけでなく、家族以外の他者との間に「なじみの関係」や血縁を越えた新たな親密圏を形成することができる。また高齢者は、施設の利用者として存在するにとどまらず、「生活者」として家事などの生活行為を行うことによって、自ら考え、行動する「主体性」を回復することができる。さらに、子どもなど世代の異なる人々との交流の中で、高齢者は自分なりの役割を獲得することができ、「支えられる存在」だけでなく、「支える存在」にもなれる。こうした多様な他者との双方向的な「支え合い」の関係性に、「共生の姿」がみられる。そして、施設内外での行事的・日常的交流により、高齢者は地域住民を含めた豊かな人間関係の中で暮らすことができている。また、小規模多機能施設を介して、コミュニティの核となる地域住民の集まり（金子 2011b : 23, 54-5）が生まれ、その集まりが施設内外で広がり、新たな交流と協働へと発展することで、地域における福祉コミュニティの形成にもつながると考えられる。

7. 今後の課題と展望

一方で、小規模多機能施設の課題としては、次の2つが挙げられる。1つ目は事業運営についての課題である。小規模多機能施設の運営主体はNPO法人が多い。「利用者一人ひとりに寄り添う」という理念の下、利益優先ではなく、利用者のニーズを第一に考えているため、経営面は決して楽ではない。施設代表者の献身的な努力、小規模ケアに対する職員の意欲によって支えられている。2つ目は行政や地域の理解についての課題である。既存の福祉制度と異なる施設の運営や新たなサービスの提供に対して、行政や地域からの理解を得ることは簡単ではなく、時間がかかる。今後、小規模多機能施設が根付いていくためには、柔軟なサービスを提供するこれらの福祉事業に対する行政の制度的・財政的支援の拡充が必要である。また施設側も、利用者だけでなく地域全体の福祉に対する役割をより積極的に担っていくことが重要であろう。

【参考文献】

- 永和良之助, 2008, 「地域社会で共に生き、育つ高齢者と子どもたち—ソーシャルインクルージョンをめぐる日本の新たな動き」, 『佛教大学教育学部論集』19, 35-41.
- 平野隆之, 2005, 『共生ケアの営みと支援』, 筒井書房.
- 金子勇, 2007, 『格差不安時代のコミュニティ社会学—ソーシャル・キャピタルからの処方箋』, ミネルヴァ書房.
- , 2011a, 『高齢者の生活保障』, 放送大学教育振興会.
- , 2011b, 『コミュニティの創造的探求』, 新曜社.
- , 2014, 『日本のアクティブエイジング』, 北海道大学出版会.
- 多湖光宗 (監修) / 幼老統合ケア研究会 (編), 2006, 『幼老統合ケア—「高齢者福祉」と「子育て」をつなぐケアの実践と相乗効果』, 黎明書房.
- 上野谷加代子, 2009, 「高齢社会の諸相(7) 高齢社会と家族・地域支援—地域福祉推進の必要性」『老年精神医学雑誌』, ワールドプランニング, 20(4), 453-459.

【成果の発表】

- 研究助成報告書『都市高齢者への共助的实践活動と世代間交流の研究』(2015年9月).
- 郭莉莉, 「日本の高齢化と小規模多機能ケアの実践—札幌市のNPOの事例調査より」, 『北海道大学大学院文学研究科研究論集』第15号(2015年12月)掲載予定.
- 郭莉莉・工藤遥, 「NPOによる幼老共生型福祉の実践(1)—高齢者の介護および世代間関係からみた幼老共生ケアの特徴—」, 北海道社会学会第63回大会(2015年6月28日).
- 工藤遥・郭莉莉, 「NPOによる幼老共生型福祉の実践(2)—乳幼児の保育および世代間関係からみた幼老共生ケアの特徴—」, 北海道社会学会第63回大会(2015年6月28日).

都市高齢者への共助的实践活動と 世代間交流の研究

代表研究者 郭莉莉
(北海道大学大学院 博士後期課程)

研究メンバー 遠山景広 工藤遥 小林真弓 金昌震

1

研究の背景

1980年前後より要介護高齢者の生活保障の場として、地域社会が着目されるようになった。

➤ 従来の画一的な集団ケアへの反省

個別ケアや社会関係の維持・構築、主体性の重要性が指摘される中で、高齢者自身の日常生活に即した地域福祉、支援方法が模索されている。

➤ 個人を保護する血縁・地縁の衰退

高齢者が社会的に孤立しやすい現代社会では、高齢者個人と全体社会を媒介する「中間集団」(金子 2007)を新たに創出することが課題となっている。

2

研究の背景

地域住民やNPOによる**共助的活動**から生まれた
小規模多機能施設への注目

➤ 小規模多機能施設の特徴(岡村 2005; 永和 2009)

- ①小規模: 民家改修型、一日の利用者は10~20名
- ②多機能(2つの側面):
 - ・ サービスの多様性— 通いから泊まり、居住、訪問
 - ・ ケアの対象者の多様性— 年齢・障がいの有無を問わない(共生ケア)
- ③地域密着: 地域の中で、地域の人々のニーズに寄り添う

3

調査課題

小規模多機能施設における共助的福祉に焦点を当て、当該施設の機能について、以下の2つの側面から検討する。

- 高齢者の生活を支える「高齢者ケア支援機能」
 - 調査結果と考察で**(1)高齢者ケアの特徴**の観点から分析
- 高齢者個人を支える「中間集団」としての機能
 - 調査結果と考察で**(2)「世代間交流」、(3)「地域交流」**の観点から分析

4

調査概要

分類	定義	調査地(略称)	調査時期と調査方法
高齢者中心型	主に高齢者向けの多様なケアサービスや生活支援サービスを提供する施設	NPO法人 「花凧」 (北海道札幌市)	2014年10月～2015年7月 6回訪問 ・施設代表者と職員(3名)への半構造化インタビュー調査 ・施設利用者の様子を中心とした参与観察(施設主催のイベントへ3回参加)
共生型	高齢者に限らず、子どもや障がい者など、地域での暮らしの支援を必要としている多様な人々を受け入れる施設	NPO法人 「しおんの家」 (富山県富山市)	2015年8月3日～4日 ・施設代表者と職員・ボランティア(7名)への半構造化インタビュー調査 ・利用者の様子を中心とした参与観察
幼老共生型	高齢者と子どもの世代間交流に特色を持つ施設	NPO法人 「また明日」 (東京都小金井市)	2015年2月23日～25日 ・施設代表者と職員・ボランティア(7名)への半構造化インタビュー調査 ・利用者の様子を中心とした参与観察
			2015年4月～5月 ・補足調査:施設利用者と家族への質問紙調査(計15票回収)

5

調査結果—事例(1)高齢者中心型施設「花凧」

➤ 施設の概要

5つの施設(1号館～5号館)

認知症高齢者を中心とした下宿施設や通所介護施設、地域住民向けの「ばりあふりーしょっぷ 花凧屋」など

➤ 高齢者ケアの特徴

①家庭的な雰囲気と「家族的介護」

職員と利用者、利用者同士は皆「花凧家族」の一員として暮らしている。

「うちのじいちゃん、ばあちゃんのように接している」(職員A)
「高齢者から『おじいちゃん、鼻水たれているよ。ティッシュ』と言ってくれるときもある。…略…(高齢者同士は)気かけあう」(職員B)



写真1 「花凧」2号館
バリアフリー下宿の外観

6

調査結果—事例(1)高齢者中心型施設「花凧」

➤ 高齢者ケアの特徴

②生活の主体者としての暮らし

高齢者は、毎日、食事の配膳・後片付けや洗濯物たたみ、ダスターの裁断などを通して、日常生活上の役割を果たしている。

→ケアされるという「受け身」の存在から「生活している主体」への転換

➤ 地域交流

①地域住民からの寄付品の販売、福祉相談を行う「ばりあふりーしょっぷ花凧屋」

→「地域福祉の小さな窓口」の役割

②夏祭りや「バリアフリー居酒屋」など多様な行事の開催

→施設利用者と地域住民との交流の促進

7

調査結果—事例(2)共生型施設「しおんの家」

➤ 施設の概要

4つの施設(「愛」、「信」、「望」、「さふらん」)

高齢者グループホームや高齢者・障がい者の共生型グループホーム、「富山型デイサービス」(高齢者や障がい者・児の通所介護)、地域住民向けのカフェ・多目的フリースペースなど、9つのサービス



写真2 「しおんの家」
多機能フリーハウス「望」の外観

➤ 高齢者ケアの特徴

・地域の中での「普通の暮らし」

「普通に地域の中であって、風通しがよくて、人も来られるような、宅老所的なグループホームを目指している」(代表者)

8

調査結果—事例(2)共生型施設「しおんの家」

➤ 世代間交流

- ・共生の場：年齢や障がいの有無に関わらず誰でも利用できる

例：高齢者は職員として勤務する障がい者と声をかけ合う

「預かりサービス」を利用する子どもと一緒に昼寝する

→高齢者は、乳幼児や障がい者・児を含めた多様な人間関係の中で過ごしている。

➤ 地域交流

- ①コミュニティカフェや趣味教室など地域交流スペース

→地域住民と施設、地域住民同士を結びつける接点

- ②地域のごみ当番や草取り、地域の祭りや運動会など地域活動への参加

→地域との関わりを保っている

9

調査結果—事例(3)幼老共生型施設「また明日」

➤ 施設の概要

3つの事業

認知症高齢者専門のデイホーム(通所介護)と保育所、地域に開放された「寄り合い所」の3事業を、同一施設内で運営



写真3 「また明日」の外観

➤ 高齢者ケアの特徴

- ・ノンプログラム、高齢者の主体性を尊重した介護

長屋のような施設内で、高齢者はソファに座って新聞を読んだり、園児を抱っこしたりして各々自由に過ごしている。

「プログラムを作ることで、高齢者が自分で感じ、考える機会を奪ってしまう」
「施設には(利用者の)主体性と言うものが必要である」(代表者)。

10

調査結果—事例(3)幼老共生型施設「また明日」

➤ 世代間交流

①「なじみの関係」の形成

高齢者と子どもは、家庭的な雰囲気の中で1日を共に過ごし、お互いの名前や特徴を個別に認識する。

②子どもとの関わりの中で「役割」を見出せる

子どもの世話役や遊び相手（食事の世話や散歩）→高齢者の心身のケアや生きがいがいづくりにつながる

➤ 地域交流

①地域の誰でも利用できる「寄り合い所」→地域住民が気軽に立ち寄れる「居場所」

②子どもと高齢者が一緒に出掛ける「散歩」という日常的な行為

→施設側から地域住民に挨拶などを行い、地域との関わりを作り出している。

11

まとめと考察：小規模多機能施設の機能と意義

(1) 高齢者ケアの特徴について

➤ 家庭的な環境と雰囲気の中で、高齢者はきめ細やかなケアを受けられるだけでなく、家族以外の他者との間に「**なじみの関係**」や血縁を越えた**新たな親密圏**を形成することができる。

➤ 施設において、高齢者は、利用者として存在するにとどまらず、「**生活者**」として家事などの生活行為を行うことによって、自ら考え、行動する「**主体性**」を回復することができる。

12

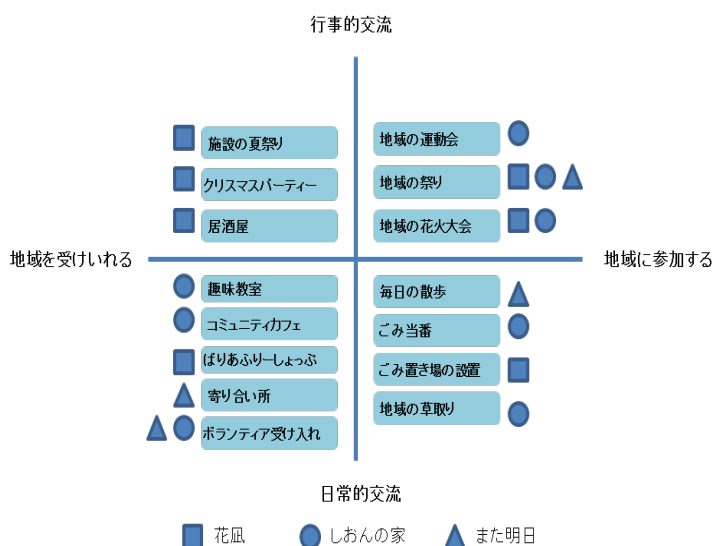
まとめと考察: 小規模多機能施設の機能と意義

(2) 世代間交流について

- ▶ 子どもなど世代の異なる人々との交流の中で、高齢者は自分なりの役割を獲得することができ、「支えられる存在」だけでなく、「支える存在」にもなれる。こうした多様な他者との双方向的な「**支え合い**」の関係性に、「**共生の姿**」がみられる。

13

まとめと考察: 小規模多機能施設の機能と意義



(3) 地域交流について

「地域に参加する」と「地域を受け入れる」ための工夫をし、行事的・日常的交流を行う



① 地域社会に高齢者を結合する「**中間集団**」の役割を果たす

② 施設を介して、コミュニティの核となる地域住民の集まり(金子2011)が生まれ、その集まりが施設内外で広がり、新たな交流と協働へと発展することで、地域における**福祉コミュニティ**の形成にもつながる

14

小規模多機能施設の課題と今後の展望

➤ 事業運営について

運営主体はNPO法人が多い。「利用者一人ひとりに寄り添う」という理念の下、利益優先ではなく、利用者のニーズを第一に考えているため、経営面は決して楽ではない。施設代表者の献身的な努力、小規模ケアに対する職員の意欲によって支えられている。

➤ 行政や地域の理解について

既存の福祉制度と異なる施設の運営や新たなサービスの提供に対して、行政や地域からの理解を得ることは簡単ではなく、時間がかかる。



- ・柔軟なサービスを提供する小規模な福祉事業に対する行政の制度的・財政的支援の拡充が必要。
- ・小規模多機能施設が地域に根付いていくためには、利用者だけでなく、地域全体の福祉に対する役割を積極的に担っていくことが重要。

15

【謝 辞】

研究者一同より、本研究に多大なるご理解・ご支援を賜った日本生命財団に厚く御礼を申し上げます。

また、ご多忙中大変長い時間調査にご協力いただいた、各施設の職員の皆様、ご利用者・ご家族の皆様に、心より感謝を申し上げます。

【主要参考文献】

- ・ 永和良之助・坂本勉・福富昌城, 2009, 『高齢者福祉論』 ミネルヴァ書房.
- ・ 金子勇, 2007, 『格差不安時代のコミュニティ社会学—ソーシャル・キャピタルからの処方箋』, ミネルヴァ書房.
- ・ ——, 2011, 『コミュニティの創造的探求』, 新曜社.
- ・ 岡村清子, 2005, 「地域三世代統合ケア—小規模多機能ケアと居場所づくり」, 『老年社会科学』 27 (3) : 351-358.

16